

パリ通信・第166号

アラブ世界研究所

1973年10月パレスチナをめぐりイスラエルとエジプト・シリアを始めとするアラブ連盟が武力衝突した「第4次中東戦争」を機に、フランスはアラブ諸国との外交および文化協力を強化する必要性を実感し、アラブ世界とフランスを結ぶ公共施設の建設プロジェクトが生まれた。

「アラブ世界」と言ってもアフリカ大陸から中東地域に渡る広大な領土に様々な文明、文化が発達し、今日では22の国家を数える。紀元前からアラビア半島を中心に培われてきたアラブ文化は7世紀にイスラム文化として栄えた。「アラビア語」という共通言語を除き多種多様の文化を一つにまとめることは難しいが、パリでアラブ諸国の伝統文化を具体化しようとする画期的なプロジェクトだった。

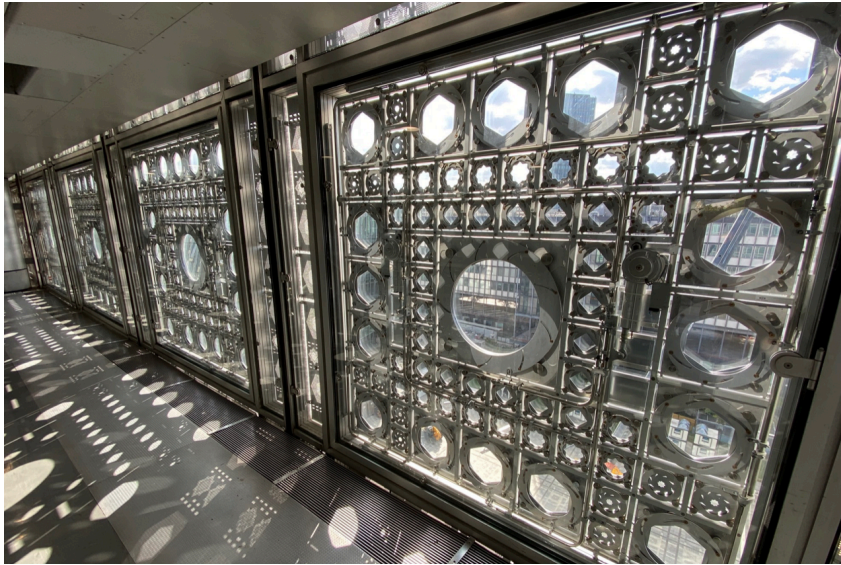
1981年フランソワ・ミッテランがフランス共和国大統領に選出され、ミッテラン大統領は1995年までの二期(当時の大統領任期は7年)14年間にフランス建築の様相を変える大規模工事に着手した。戦後の建築を担ってきた鉄筋コンクリートからアルミとガラスを建材にテクノロジーを活かした新たな建築へと移っていく。「アラブ世界研究所」はその良い例で、1980年のコン



ペで知名度が低かったジャン・ヌーヴェルとアーキテクチャー・スタジオが選ばれた。

「アラブ世界研究所」は5区のセーヌ川沿いにある。川を挟んでノートルダム大聖堂を望み、パリ第5大学があるジュシューと動植物園に繋がるパリ第6大学に囲まれた立地である。

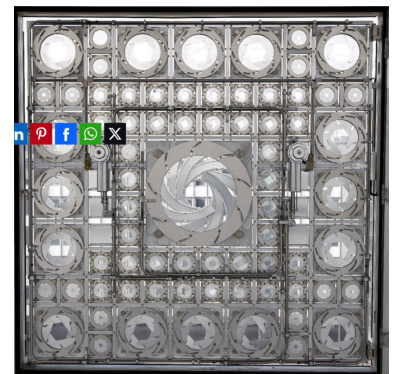
セーヌ川に対して東西に長く延びる南と北の2つのブロックに分かれており、なんと言っても南の壁面全体を覆う240枚の「ムシャラビエ」(moucharabieh)が特徴的である。



複雑な幾何学模様や草花模様を表現した「ムシャラビエ」はイスラム建築になく
てはならない要素だ。木や金属で模様を構成する網目
パネルで、室内外を問わ
ず、日差しの強いアラブ諸
国で頻繁に利用されてき
た。本来の目的は①ひよけ
として直射日光を和らげる
②網目になっているので通
気、換気ができる③外から
は見えないが中から外が見

える、つまり、エアコンの役割を果たしつつ、光をコントロールし、極めて美しく豪華な
装飾を生み出し、隙間からこっそり覗くことが出来る。アラブ世界の気候、文化ならでは
の建築要素に着目したジャン・ヌーヴェルの成功である。

壁面全体を覆う横24 x 縦10、合計240枚の「ムシャラビエ」は一目ただけでアラブ世界を喚起させるインパクト
を持っている。ガラスの枠に入れた一枚の「ムシャラビエ」
中央には大きな丸い穴が開いており、周囲の小さな丸い穴
と共に太陽光をエネルギーに閉じたり開いたりして日差し
を調節することができる。カメラや人の光彩が光に開閉す
るのと同じだ。室内は「ムシャラビエ」が落とす影が美しく、独特の雰囲気がある。



1987年11月30日ミッテラン大統領、当時のアラブ連盟事務局長シャドリ・クリービ、当
時のフランス首相ジャック・シラク、「アラブ世界研究所」初代館長ポール・カルトンに
よって開館式が執り行われた。アラビア語教育、展覧会、コンサートなどの文化活動を始
め、9階建(日本式には10階)の3階部分を占める図書館は学生や研究者に限らず一般の人々
誰もが無料で利用でき、アラブ文化に関する有数のコレクションを誇っている。2017年
建立30周年を記念して240枚の「ムシャラビエ」修復が実現し、2000年から技術的な理
由で止まっていた「ムシャラビエ」開閉システムが再稼働された。2013年から「アラブ
世界研究所」理事長を務めるジャック・ラング氏の強い希望だった。

フランスはマクロン大統領になって8年が過ぎた。内政混乱が続き外交も厳しい状況にあ
る。フランスとドイツが強くないとヨーロッパの存在感がなくなる。ウクライナ戦争もガ
ザ地区紛争もヨーロッパ不在の国際政治と言わざるを得ない。「アラブ世界研究所」がで
きて38年、フランスは弱体化していくのだろうかと思問に思う。(古賀順子記)